



Title	Prevalence and Impact of Past History of Food Allergy in Atopic Dermatitis
Author(s)	Kijima, Akiko
Citation	大阪大学, 2013, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/26284
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

Synopsis of Thesis

〔論文題名: Thesis Title〕

Prevalence and Impact of Past History of Food Allergy in Atopic Dermatitis
(食物アレルギーがアトピー性皮膚炎に及ぼす影響)

専攻名 : 情報統合医学皮膚科学
Division

学位申請者 : 木嶋 晶子
Name

〔目的(Purpose)〕

アトピー性皮膚炎は成長とともにアウトグロウする傾向があると言われてきたが、近年、思春期や成人期になっても症状が遷延するケースが増加している。しかし、思春期を含めたアトピー性皮膚炎の疫学調査は稀有であり、その実態、背景の把握が必要である。我々は、日本の大学生におけるアレルギー疾患の既往率、また、合併疾患の有無について把握することを目的とし、アトピー性皮膚炎(AD)、気管支喘息(BA)、アレルギー性鼻炎(AR)、食物アレルギー(FA)について後方視的コホート研究を行った。

〔方法ならびに成績(Methods/Results)〕

2011年度大阪大学新入生($n = 3,321$, 男性: 2,209, 女性: 1,112)を対象とし、問診票を郵送した。問診票には、本人と家族についてのアレルギー疾患の既往歴、本人のアレルギー疾患の臨床経過、また、アトピー性皮膚炎の悪化因子についての項目を含めた。

AR、AD、BA、FAの有既往率は、それぞれ35.7%、16.5%、9.9%、7.0%であった。また、各アレルギー疾患(AD、AR、BA)は、各疾患特異的なアレルギー疾患の家族歴を有することが分かった。BAとARの発症年齢に関して、ADを合併する場合はADを合併していない場合と比較して有意に低かった(BA: $p=0.010$, AR: $p<0.001$)。更に、ADの発症年齢に関しては、FAを合併する場合はFAを合併していない場合と比較して有意に低かった($p < 0.001$)。FAを合併するということは、アレルギーマーチの進展における重要なリスク因子であることが分かった。また、AD、BA、ARにおいて、思春期という時期は、症状の軽快時期のピークであることと同時に、症状の再燃時期のピークでもあるということが明らかとなった。

〔総括(Conclusion)〕

これらの結果は、FAを合併するADは、続発するアレルギーマーチ発展の端緒となりうるものであり、遺伝的ハイリスク群において、早期の治療介入がアレルギーマーチの予防に重要であることが示唆された。また、思春期のアレルギー疾患においては、再燃群を減らし、軽快群を増やしていくためにも、この時期の適切な治療が重要であるということが示された。

論文審査の結果の要旨及び担当者

(申請者氏名) 木嶋 晶子													
論文審査担当者	<table border="0"> <tr> <td></td> <td>(職)</td> <td>氏 名</td> </tr> <tr> <td>主 査</td> <td>大阪大学教授</td> <td>岸 山 一 朗</td> </tr> <tr> <td>副 査</td> <td>大阪大学教授</td> <td>磯 博 康</td> </tr> <tr> <td>副 査</td> <td>大阪大学教授</td> <td>玉 井 寛 人</td> </tr> </table>		(職)	氏 名	主 査	大阪大学教授	岸 山 一 朗	副 査	大阪大学教授	磯 博 康	副 査	大阪大学教授	玉 井 寛 人
		(職)	氏 名										
	主 査	大阪大学教授	岸 山 一 朗										
副 査	大阪大学教授	磯 博 康											
副 査	大阪大学教授	玉 井 寛 人											
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>アトピー性皮膚炎は成長とともにアウトグロースする傾向があると言われてきたが、近年、思春期や成人期になっても症状が遷延するケースが増加している。しかし、思春期を含めたアトピー性皮膚炎の疫学調査は稀有である。著者らは、日本の大学生におけるアレルギー疾患の既往率、また、合併疾患の有無について把握することを目的とし、アトピー性皮膚炎(AD)、気管支喘息(BA)、アレルギー性鼻炎(AR)、食物アレルギー(FA)について後方視的コホート研究を行った。</p> <p>AR、AD、BA、FAの有既往率は35.7%、16.5%、9.9%、7.0%であり、またAD、AR、BAは、各疾患特異的な家族歴を有することが分かった。発症年齢のピークはAD、BA、ARの順に推移し、FAを合併するとAD、ARの発症年齢が低く、ADを合併するとBA、ARの発症年齢が低くなることが明らかとなり、更にFAを合併するとAD、BA、AR全てを合併するリスクが高く、つまりFAの合併は、アレルギーマーチの進展における重要なリスク因子である事が分かった。また、思春期は、症状の軽快時期のピークであると同時に、再燃時期のピークでもある事が明らかとなった。</p> <p>これらの結果は、FAを合併するADは、続発するアレルギーマーチ発展の端緒となりうるものであり、遺伝的ハイリスク群において、早期の治療介入がアレルギーマーチの予防に重要であることが示唆された。再燃群を減らし、軽快群を増やしていくためにも、悪化因子対策を含めた適切な治療が重要であるということが示された。本論文はアレルギー疾患の診療に貢献しうるものであり、学位に値するものと認める。</p>													